

1278  
10

村田

朝夷巡嶋記全傳第二編卷之五

東都

曲亭主人編輯



初輯第十九

野干玉の單燭  
蘓弥深の袖巾

山亭主人

八嶋室平師任ハ美秀ヲ投折ラレテ王ガ身ヲ起トカカフ後ハ  
兵卒ハ  
夥クモ。さるもともと。あまの志を激して。葡萄がうら。大地を鼓動しひひ  
者共ク。なご。虚乱々。熟視て。芳。縱朝夷。あはれ。とて。鬼神。あはれ。あはれ。と  
まれば。む。む。怪。死。て。歩。行。不。自。由。多。る。の。く。軍。配。ハ。多。裏。多。る。掛。さ。や  
く。れ。と。敷。圍。ハ。夥。兵。ホ。有。理。と。歎。之。一。て。其。勢。を。憑。む。群。雀。赤。木。の。川。積。木  
著。て。吐。き。嘔。て。懸。て。鬼。れ。バ。り。の。く。と。や。と。美。秀。ハ。其。勢。を。添。く。る。移。の。立。木。を  
根。扱。よ。と。引。抜。た。く。搦。死。伏。せ。難。倒。し。縱。横。を。礎。に。位。け。廣。光。の。亦。又。を

月長二編卷五

編輯



燕居安坐のど寝ありねばどく禍を避す。肝要あり血は深る衣を乞飽  
 まで食して走るもかといふは廣光ありて酒食をとり出て美秀と共に  
 なるべし。割籠さし准備しつ邊しく衣を脱更姿を窺し笠をふりくし兩人  
 奔一宿所を出るは美秀八先立て大石山を駆け入りぬ。その時廣光袂を  
 掖て某妻と子どもを赤貝まで出せり。おたけういふせまると不樂しらは密語  
 うち微笑しのかそのう心安うれ某昨夕おはせよ赤貝の郷小して浅良井ある  
 對面せり。これ上野のうさより来た婦人かよはせしてその家に入らせしと死  
 灯光は面をありつて送はゆけゆけとあられ馳てその奥に聚會て五頭平が  
 時夏が奸計行着ハ井平が資よありて共北国を投て脱去せとせられり。す  
 浅良井のよれをばを特は彼引太郎と申ん。いと精悍し死めのとらんれがどが  
 肺肝を説示してあづその親苗四郎ホが亡骸を葬せ廻婦人梅見より太郎を

傳けてその夜の中越の中州婦員岩神の里正の稻向判五許遣し。この稻向は  
 の某と舊縁あり。曩の某加賀の小松へ送くお苗様とのみありて不憶もその  
 女兒友鶴が危窮を救ひて恩人三といふのま環會媒灼せしむ。辞まるは  
 なく友鶴と娶て。岩神小歩を駐めての春を迎へた。某消息を和慶の  
 内室子息のうを判五文鶴よ憑遣し。うらなは心安くおひぬ。只心ゆかたが吉見  
 ぬの往方佐味屋内高利の鎌倉殿家召使して今加賀よはせをせらる。ぬ  
 とおぼし七遙と北国へ赴記を進退を便せらん。うらな内室その夜にやは  
 起行せ途はてあやむが尉者と井平を告てあり共岩神の稻向許赴け  
 ことり太郎も意おさせて遠くおせ。和慶のうらなは心ゆかたをかくおひり。は  
 某八曉るけ歩のほどて多程果て謀る所は違ふ。和慶八討の天鼓はう  
 巻れ既危くおえり。おぼしうて捷徑を驚直走り近つた室平未を松を



とめをん之ちくも井平は心をゆりて一大事をなせしと懲められぬく  
 彼奴ハ生拘るハ創小して噴を熱る賜を冷むと死せし馬の鞍おれた明の  
 准備をせびやと焦燥之野袴の袴結を引提く外面へおれが馳く  
 牽よる馬は閃とうち乗せバ着堂奴隷五六人これ後まじと馬よ  
 引添ハ喘くを後ひる時夏ハ鞭を揚ぐ一騎馳は進みて挾野の船橋  
 をも渡りて足掻を駐めくえくるは後僕一人もあざりたるその川より  
 あやハ五頭平が隊下の野客ホ賜をり河原は烽火を立るとさハ  
 忽地は集合とん豫てつらとわれバ彼ホを謀りて援よせバと既よ  
 准備をなせし馬よりなりてこの河原よまづ狼煙を立たりける  
 こもよありて彼此は散在とる野客ども五人三人走り程は暫時よ  
 三十餘人をゆるし時夏竊は欺びて野客ホよりち對ひ入る多しこの

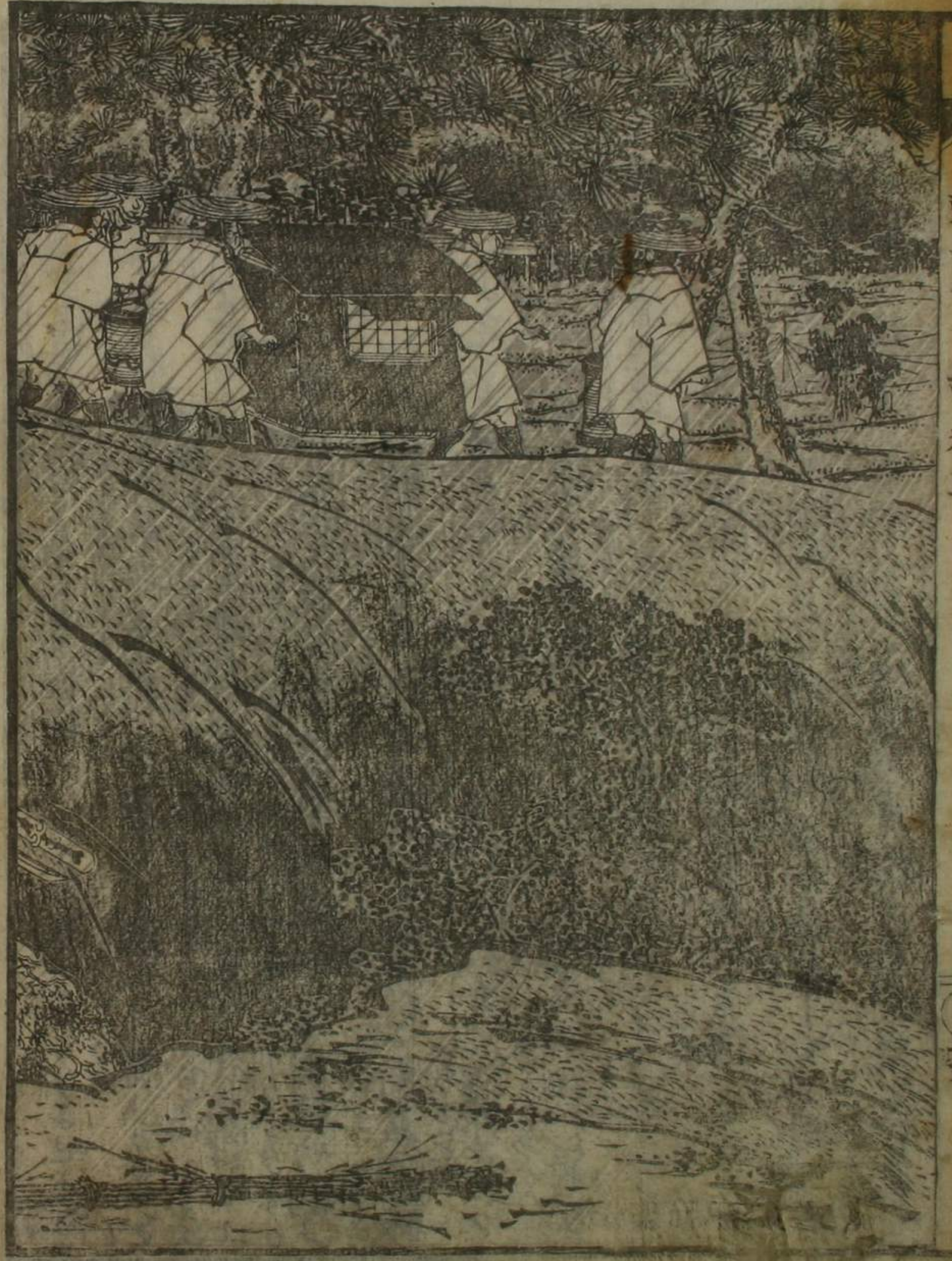
中よハこれと認るるものありしはハ刀野太郎之同郷の浮浪人吉見尉者  
 美邦も早蠅と一味のめし下郎井平は謀られて心変りてなるは渠ハ  
 舊悪ありめかれが領主は告ると叶は鎌倉へ直訴せん今宵井平  
 共侶よ上野のうへ走るる件の風声をゆもゆえて五頭平は志野を名も  
 な死土民よ生拘るを既よ獄舎に繋れり。これ爵憤は堪堪と美邦  
 ホを替りんとあまむハ追來つれども如法夜中して後僕続々は汝達ハ  
 それを資て彼兩人を追替りて早蠅が怒を復さん各位同意せり  
 事やと賺せバ衆皆大に驚死頭領捕きてハ吾們もも既よ  
 危し切くその吉見とやん井平とより白徒を替りて退散せし  
 一人がいハ食点頭をいあハさるとそあまむこのうき夜は鏡松もも  
 ひとと懸る行客二人中山道を投てゆくをえつるハ今のとありき彼美邦

小はあつらふらぬ。といふを時夏はあむ。とこあつく疑ふ。うらむ追首の  
 と突つて再び馬より乗る。折時夏は後僕ハ橋をさして走らぬ。  
 さへバ進めと野客も固より熟路のよりあむ。バ折得兵器を引提て馬より  
 先は逸足半で飛鳥の如く追蒐う。さう程は美邦ハ井平共侶通霄  
 急ぐとまれど野干玉の鳥夜ハあむ。バのづう。歩の運も果敢の廣元  
 小がみ今さうに心よくれ。いづく後方ぞんえ。立留り候とハあ。小夜  
 深く曉ちく。あ。比は稍下野の封疆ををかく。扱野の津のあ。勝澤の  
 松原は且く懸ハ折。をあむ。入夥散動。起て美邦を逃む。をい。声遙。あ。て  
 う。も。バ。西。入。齊。一。立。あ。が。る。追。捕。の。兵。卒。近。つ。た。ぬ。あ。あ。て。防。戦。を。ハ。白。く。先  
 と。も。脱。れ。ご。ご。え。ん。さ。ん。と。左。右。よ。立。立。れ。あ。う。さ。ら。松。を。木。盾。よ。う。て。刀。の  
 鞆釘唾湿。一。捧。め。る。て。ま。う。程。は。真。先。進。ま。る。一。下。隊。の。野。客。十。餘。人。單。燭

ゆ。と。して。走。り。近。つ。と。信。と。ん。と。ま。白。徒。ホ。ハ。あ。よ。ま。う。る。と。う。ま。せ。よ。と  
 聞。た。つ。妙。人。と。ま。れ。バ。美。邦。井。平。双。を。引。抜。き。ま。と。逆。へ。く。競。ひ。く。る。を  
 殿。と。破。り。誑。引。よ。せ。て。ハ。丁。と。破。る。と。煉。の。刀。火。電。光。石。火。と。晃。一。勢。靡。け。一。上  
 一。下。秘。術。を。盡。し。て。瞬。間。は。五。六。人。或。ハ。大。袈。裟。車。斬。真。額。割。割。乾。竹。削。り  
 身。首。処。を。異。す。て。仆。る。死。骸。累。々。う。残。る。もの。ハ。この。勢。ひ。よ。舌。を。巻。れ。葉。戰  
 あ。く。踏。足。さ。へ。よ。定。ら。ぬ。道。の。ぬ。う。此。凍。解。ハ。單。皮。脱。あ。ぬ。ぬ。の。如。横。飛。去。つ  
 逃。亡。う。誘。この。際。中。と。井。平。ハ。美。邦。を。つ。ま。ぐ。り。て。双。を。撃。つ。納。れ。ハ。再。び  
 歩。野。人。馬。の。足。音。程。遠。く。を。裏。れ。う。井。平。騒。ぐ。氣。色。なく。某。あ。ら。ま  
 踏。留。り。て。殺。散。し。ゆ。い。ん。冠。者。ハ。う。く。延。さ。せ。あ。へ。と。只。管。は。練。れ。ぬ。美。邦  
 一。歩。も。退。く。は。追。兵。ハ。殊。更。大。勢。な。ん。よ。何。び。和。殿。を。捨。死。中。て。何。国。へ。逃  
 隠。る。べき。只。共。侶。ハ。死。を。ぬ。と。進。む。を。急。推。さ。り。賈。誼。が。策。も。鼠。を。殺。す。器。を



月長二編卷五



草子二編卷五



忌むといへば真の追兵なるが命を限りは禦死なむ。這奴ハ鳥合の野客  
 ありて備おぼるに隊伍つらき整を數十人せり。殺散さんと易  
 願ふ途より時夏は馳催されぬ。あべさうとて由断せり。案内知る  
 かに二隊まゝれて後より狭き攻めらば防禦なり。難美及人知君を  
 退却して鷹崎川をうち渉し。二の目を成す。俟と誘ふ。おの西當りて  
 蕉火の光隠るとあつたれば美邦遙るん之。そ原來後陣ハ亦敵ありて  
 野客二十餘人あり。蕉火照さる。暮直追覓来つ。鳥夜立。在む井平と共と  
 推し巻せて彼生拘と喚ぶ。早雄の野客六人合する。蕉火投げて。面も  
 晝て。鬼さ。井平ハ抄高松の蔭ハ隠れ。頭れ。千変萬化と書  
 いも烈。大風ハ一隊の野客。砍立ち。疲負を棄て。退バ。野。後僕入る。

後陣の野客あり共。又引包て。野客ハ井平ハ美邦を延えんと。あひ  
 野客も。焼む。五六人を砍。頻進で戦。野客ハ柱。ひく。只  
 火攻。道芝。火を放。風上。攻。天。陰。曉。東南の  
 風吹。その火走。井平。前後左右。燦。三面六臂あり。脱れ  
 ぐ。おん。おん。吹。風のま。驟雨。頻降。疾。盆。役  
 如く。忽地。火。滅。黒白。井平。不。便。を。ゆ。く。  
 多勢。中。割。入。衝。掛。枝。息。武藏。の。走。り。の。途。を  
 引。敵。又。跟。て。美。邦。と。間。を。隔。て。後。を。延。き。時。夏。今  
 さ。井平。を。漏。し。馬。上。身。を。燈。を。蹴。立。て。何。処。ま。追。覓。雨。ハ  
 お。降。道。の。泥。馬。上。後。れ。朽。焦。燥。拍。ハ  
 鞭。遣。ん。疲。れ。馬。の。松。の。枝。踏。て。横。を。け。け。け。ハ

敷れて起もぬを躬みづかに只泥ぬは塗れり。當下たぎ後者のち亦走りまり其の声をあべに辛く。小これ馬を牽ひ起し。主を勅しをせる程は田の中の家は鷄鳴く彼誰時ありや。多く。はは野客亦天の明光とまるを見える影護ひえんを肩に負ひて。まるがゆく影をかしり。再てあら集合ひて時夏今まるを見えるをならぬの。あら徳をまる後者を焚くを美邦を漏れる井平東へ走れり。這奴をしも。影を六世の胡慮もなんのもや雲時後まるを鳥鶴川のほろろと追着んと疑ひし者共統けのちちち歩み進めば後僕亦馬を牽ひて追ふ。程は雨歇雲はきゆりて先ちもる程は井平東へ走れり。鳥鶴川まで走れるを天へのくと明く隨ふ雨之既は霽れる航人が。いまなくて船は前面の岸にあり。追兵逼るはいせまり。とあら心安く。足れば水際は五六人轎子を昇ちりて船のあらをあらぬと見入るも。

轎子の内にあら五十あまの尼ありけを客去りぬとおぼりてそが海をよりん。あら五六人は後僕を焼くを蕉火を砂の上に投棄て蹴揚の泥を洗ひし。船と遅くと咳り。井平又これを見て嚮は勝沢の松原より西に下りて見えつ。火はの蕉火はあらと未之後徒もる人を憑ぎてあら遠く轎子は。ほろろと進つき跪起す件の尼もち對ひ忍辱慈善を宗としめ聖と見せり。あら御蔭に立ちまるを影の追兵を殺脱て稍あまるは未之後の前面へ。あら法衣の袖を匿して救せぬとうち歎けば尼も亦つりて見えつ。あら十惡の罪人なりも既は懺悔の心あり六仏の慈悲は漏れて作況て。今も所極惡の人にあら縁故はあら後もいままるあらあらはら然と野渡のりなき巴笈の志が隠を曲もしこの轎子の内に潜ひて前面へ

一かひに憑くくけつとて、ハ軀を出て床に尻をけ。  
 後僕はあろほさして濡まてるは井平を轎子を隠しるは浩は時夏ハ  
 後者共侶は泥を塗れて喘み追ま来つ水際に立き彼を再三び見るは。  
 航人ハ軍で出で正しくあへ来つんは翅をかひらちては前面へはなりあん。  
 あら不審とは吐けつて轎子に目をつけて立あんとは程は尻の後僕推禁め。  
ハ狼藉あり鳴乎なりといはせもあへむ冷笑ひ大罪人を舍藏ハ出家行  
と科ハ脱しば吾侪を指て狼藉ハ鳴呼ことは汝ホと狼藉の荷擔者。  
 嗚乎の癖者なるはれと疑ひあらまり其處退る處やと勢ハ猛く捨除て  
 あんとは尻の後僕ハ床几をあちく遠く轎子の戸口に立て遮り留めハ  
 あらぬ士士か家かしてハ門戸あり途中にハ轎子も亦一家ハ異  
 あり出家とあら悔りて縁故を告げてはさらけらハ狼藉あり

嗚乎の所行ハ何といふといはれく時夏ももく逼立口さらしくハ  
 ぼととと然も名告てせん執推時ハ所縁の足利ハ扶持  
 せらるハ野時夏といはるハ七命不美の家僕井平ももく逃来つハ  
 その影ごも見せらハ舍藏ハ下の影んあらまり轎子の戸を引  
 もあらして示せらるハ疑ひと釋りあんと速まにハ後悔せん。  
 其時ハ敦国ハ尼ハ只の顔を熟視つらち笑ひ時政ハ縁者とハ兼  
 何の親族も武断ハ拘られどのが寺法に任せられと鎌倉の古将軍頼朝。  
 御教書とあらり伊豆國藍玉の女僧寺ハ三位親政卿の後室といはれる。  
 菅蒲の老尼住持と吾侪ハ尼公の弟子と名ありの信濃國  
 川中島あり善光寺へ代系をうけぬり賽の路次をがり寺法を承りてあら。  
 凡當寺に入るハ不美亡命の男女といはる助けられて定法ありハ天子もこしを



推乃武蔵國埼玉郡大田の莊に退隱して遂に又仕をむ影の年月を送りぬるをうて  
 吾侪の武蔵大田の莊へつるめ其地を傳ひ傳ふといふ井平の辯の越し  
 小石も一旦危窮を救れるは辯を去るもあらずとあはれを義の何  
 とうあひあらん廣光は落ひる言葉のあはれを乾ぬふれのをどり武蔵野の  
 うけが花の陰に立よお邊水といれな心づき限りといふせまじい國に  
 さて巴べきよあはれがどが尻尾は後ひて武蔵を去りたるかくこの夜に熊谷東南  
 あり戸田の八町村に宿りつ後僕臥草に入ると比尾の井平を召近つてまづその  
 本貫姓名をうづり又逐電せし縁故又その友のうへさへ曲ま問ふ井平の  
 あくは匿してあはれなりなんとあひあられ膝を進めて首より尾りまでうづり  
 説あり又美邦のよと告美秀がうへさへ夜も抱かれ尻尾の嘆息し  
 誠は和殿の痛し地薄命の人や免加の友なる士士達も大うこゝろ枉屈よ

身と厝うひていくその患苦をよめん想像もふ哀れは傳り就くを美秀  
 とうの人の安房大瀨の浪人として朝夷と名告ると飲りその人の乳名を阿三郎  
 といひいづらわと問バ井平涙をそそいいうちてあはれを養父の浅江の  
 豊六とゆん乳名を阿三郎とよめるゆひといひて尾の目をあはれ  
 原來の不思議の縁を吾侪ハ則彼人の乳母兼子といひ此乳母君は  
 諱を冒して巴の尾と叫れりといふ名告れが井平も小膝を拍て驚嘆し是  
 あまはとむうりお救ひ氣色は顔もて感涙禁あは朝夷の物語り  
 男子やもまゝせめ心標の縁をいひ去歳のその月別れ時を彼人八只  
 母座前の往方いふと忠告といひ出ぬぬ日かゝるを乳母の垂乳母はあはれ  
 危難を救れり伴をそのが身を朝夷のよせまほしれぬる六送る  
 再会その救ひハハあはれり殊更をうづり免は任せぬりの有為將変遺憾を

おぼへて其とも幼少より孤ならずいへ友垣結びその日より朝夷の如く弟の如くその今又ある尼御前を母とてあひまわり子と愛しあひはらへば頭をうち掉していふれは僻多かる棄恩人無為報恩者と佛の説く法的首途せし日あり浮世のまは忘れはる件の子か子なるぬえ物体か生涯面を對せたるも恙なく幸ひあは忘れて年を歴しあはれ人の言れ兼は絆されし煩悩の火坑に入らばいせん彼人も又如此あり吾侪が絆とならば其志氣遂に弛を名をとりてくは絆のまらせむ朝夷の再会のとありとも尼が人を告め恨とあり抑吾侪は三年來関の八州を編歴し今茲正月の上院菖蒲の尼公は值偶し侍りて藍玉院杖をさめ此度信濃の善光寺へ代系は立ちし八件の尼公の本願あり親政卿仲細朝臣大約免道中討死せし人々の菩提の爲は彼霊場へ三三度系指

せんと誓ひついで治承のてしわあり系統三二度及べし今もつる一度なれども九十餘歳にちかむせむへは起居も不自由せし結願の義を遂らしこのみとのとていさう歎せあが痛く系統をたきりて尼公の袈裟法衣をぬり後僕さへも駭けて晴の旅をたてしあや勤果信は吾侪父國九州彼此を國の初念を遂んとあふりかれは死身とあひもあふり程はわたり然るを母とあひ子とあひ愛しく歎待れては卻歎の森下あは亦袖濡せし媒かん只因もか縁もなれば尼法師とて人を送り後をうらむをわたりと叮嚀し説示し健氣さよ井平まほしく感激して坐は惭愧堪ざるのそ又慰めあはく畏りて退れぬればその次の日あり井平はと真成ま巴の尼を勅り心を用ひざりてかく一宿ありて大田の莊あり藍玉院は来りれば巴の尼は院主の尼公は善光寺へ詣りてあはれをいふ又井平が絆の起ちあはれ告あらせし尼公は殊

隣て召よせて見ぬは面白く眉秀て疵かた玉と云ふまは儔罕ある美男あり。辨舌水の流るごとく才器とのづらうは顕れて憑一氣の壮俊のまは尼公のあく愛をせめて且客房は退せ巴の尼を勞ひて休足の暇をぬり別人をと井平を管待させぬひたり。さう程はその夜さう廣網朝臣ハ例のどく尼公の安否を訪んとて藍玉院は緒来ぬひつ當下尼公ハ井平が輝の趣を告めてその才貌を稱すハ廣網はてうち微笑し寔は宜かしくぬる能あるのみみん試みハ一見せし。その此召せぬへうと他意もかく心ぬるハ尼公のいぬく欲びて臂ちうに使者を介漆の老女をえんて云々と云えぬかて又媼子井平ハ巴の尼は案内せられ廣網朝臣は見え廣網遙よこれを見て媼子井平とハ汝も薄命ハ才子なるは「尼公の老物語はつづこれも亦時は遇む年来村落は退隱をぬれば辭断絶てなし。鎌倉中もどしと放浪世のりもすまはし武藝文章

さぞあらん長途の疲勞のべきさう尼公も徒然とをりませハ夜らもは涙を明さん誘ふかこと召びよせて四表八表物語はまづその言辨応答を詰り試と武備文事何れとぞ一ツツ向うは井平ハ辞讓してみかあむぞとのいぬめと侮りごとく恥と多うもの才測るうもあはれはむむも嘆賞し世ハくる奇才あり。これ大國を領しハ半とさうして佐とせん。数頃の田園を養ふ今ふしてハせんまはか。あうハあれどもいふへの賢人の迹をみる。孟子ハ編小の藤國は遊び武侯ハ西叟の蜀漢を佐う。和展り村落の二隱士を厭むハ且くあう留まじり。とやもうくやの扶持をせし。いふうけはるる。井平額をつき淨徒寔は若くあまうて有がれを泰し。さうあがら。江。諾ひら吉見殿の安危定うなむ。件の刀祢は辭せばしてあまは。苦心はまふ人且く其の暇をぬり。加賀の小松は赴けて美那の安危を

ころ。時宜<sup>とき</sup>はよめて又<sup>また</sup>さうに見<sup>み</sup>来<sup>き</sup>入<sup>い</sup>り内<sup>うち</sup>ありと蒙<sup>まう</sup>らばあよみきこのが幸<sup>さい</sup>と  
 ろひ入<sup>い</sup>て靖<sup>せい</sup>しうバ廣<sup>ひろ</sup>細<sup>こ</sup>ハその信<sup>しん</sup>あり。美<sup>み</sup>あるを稱<sup>あや</sup>て再<sup>また</sup>び苗<sup>な</sup>めはちんふ力<sup>ちから</sup>及<sup>およ</sup>び  
 より也<sup>なり</sup>加<sup>か</sup>北<sup>きた</sup>へ赴<sup>む</sup>くとも美<sup>み</sup>邦<sup>ほう</sup>多<sup>た</sup>かバ彼<sup>かれ</sup>起<sup>おこ</sup>りありや今<sup>いま</sup>さう定めごとくさし。あ  
 彼<sup>かれ</sup>人<sup>ひと</sup>あよすあくバ直<sup>ち</sup>まあやこへへと来<sup>き</sup>よ他<sup>た</sup>は身<sup>み</sup>を寓<sup>よ</sup>かば怨<sup>うら</sup>んをわめて  
 後<sup>あと</sup>れらる。一<sup>いち</sup>兩<sup>りやう</sup>日<sup>にち</sup>ハ休<sup>やす</sup>足<sup>あし</sup>してゆやうよ夜<sup>よ</sup>足<sup>あし</sup>せよ。之<sup>これ</sup>も迷<sup>ま</sup>憾<sup>かん</sup>の趣<sup>おも</sup>合<sup>あ</sup>心中<sup>しんちゆう</sup>  
 亮<sup>りやう</sup>察<sup>さつ</sup>あるべし。とひと叮<sup>てい</sup>嚀<sup>ねい</sup>よはえさせく衣裳<sup>いせう</sup>一<sup>いち</sup>襲<sup>しゆ</sup>を賸<sup>あま</sup>し首<sup>くび</sup>蒲<sup>ふ</sup>の老<sup>らう</sup>尼<sup>に</sup>も  
 共<sup>とも</sup>侶<sup>りよ</sup>は名<sup>な</sup>残<sup>ざん</sup>を惜<sup>おし</sup>せぬとも既<sup>すで</sup>に暇<sup>いさま</sup>をわづらから。下<sup>ひ</sup>日<sup>にち</sup>も安<sup>あん</sup>居<sup>き</sup>忠<sup>ちゆう</sup>起<sup>おこ</sup>ふやん  
 加<sup>か</sup>北<sup>きた</sup>へ赴<sup>む</sup>た吉<sup>きち</sup>見<sup>けん</sup>尉<sup>ゑい</sup>者<sup>しや</sup>の安<sup>あん</sup>危<sup>き</sup>をわづらふ。又<sup>また</sup>當<sup>たう</sup>院<sup>いん</sup>は系<sup>けい</sup>干<sup>かん</sup>て清<sup>せい</sup>恩<sup>おん</sup>を報<sup>ほう</sup>はるん  
 かくハ明<sup>めい</sup>曉<sup>きやう</sup>茂<sup>まう</sup>足<sup>あし</sup>と思<sup>おも</sup>ひ決<sup>けつ</sup>てゆと潔<sup>けつ</sup>く答<sup>こた</sup>やせバ廣<sup>ひろ</sup>細<sup>こ</sup>ハその意<sup>い</sup>は任<sup>まか</sup>して更<sup>さら</sup>は苗<sup>な</sup>別<sup>べつ</sup>の  
 孟<sup>まう</sup>とせとせ又<sup>また</sup>抱<sup>だう</sup>ぐらうかうなりて。鷄<sup>けい</sup>鳴<sup>めい</sup>曉<sup>きやう</sup>を報<sup>ほう</sup>る程<sup>ほど</sup>は井<sup>い</sup>平<sup>へい</sup>恩<sup>おん</sup>を謝<sup>しゃ</sup>して  
 客<sup>きやく</sup>房<sup>ぼう</sup>は行<sup>ぎやう</sup>装<sup>さう</sup>。巴<sup>ぱ</sup>の尼<sup>に</sup>子<sup>し</sup>別<sup>べつ</sup>を告<sup>つ</sup>て。ゆと北<sup>きた</sup>國<sup>こく</sup>へぞ起<sup>おこ</sup>行<sup>ぎやう</sup>る。

作者<sup>さくしや</sup>云<sup>い</sup>足<sup>あし</sup>利<sup>り</sup>より挾<sup>さ</sup>野<sup>の</sup>へ赴<sup>む</sup>くよ今<sup>いま</sup>の順<sup>じゆん</sup>路<sup>ろ</sup>を推<sup>おし</sup>た。新<sup>あたら</sup>田<sup>た</sup>木<sup>き</sup>崎<sup>さき</sup>太<sup>た</sup>田<sup>た</sup>八<sup>はち</sup>木<sup>き</sup>  
 梁<sup>りやう</sup>田<sup>た</sup>川<sup>せん</sup>崎<sup>さき</sup>九<sup>く</sup>七<sup>しち</sup>驛<sup>えき</sup>を歴<sup>り</sup>て九<sup>く</sup>里<sup>り</sup>あり。又<sup>また</sup>當<sup>たう</sup>院<sup>いん</sup>は系<sup>けい</sup>干<sup>かん</sup>て清<sup>せい</sup>恩<sup>おん</sup>を報<sup>ほう</sup>はるん  
 この間<sup>あひだ</sup>は船<sup>ふね</sup>橋<sup>はし</sup>とせ。趾<sup>あし</sup>ありと高<sup>たか</sup>崎<sup>さき</sup>の東<sup>あづま</sup>。勝<sup>かつ</sup>澤<sup>さく</sup>田<sup>た</sup>中<sup>ちゆう</sup>のほろより。西<sup>さい</sup>小<sup>せう</sup>  
 丁<sup>てい</sup>より。又<sup>また</sup>足<sup>あし</sup>利<sup>り</sup>より武<sup>ぶ</sup>藏<sup>ざう</sup>へ赴<sup>む</sup>くハ上<sup>かみ</sup>野<sup>の</sup>と武<sup>ぶ</sup>藏<sup>ざう</sup>の封<sup>ふう</sup>疆<sup>きやう</sup>を神<sup>かみ</sup>名<sup>な</sup>川<sup>がは</sup>を四<sup>し</sup>里<sup>り</sup>半<sup>はん</sup>  
 挾<sup>さ</sup>野<sup>の</sup>は出<sup>い</sup>てハちと遠<sup>とほ</sup>く。あつたも彼<sup>かれ</sup>津<sup>つ</sup>ハ大<sup>だい</sup>和<sup>わ</sup>も同<sup>どう</sup>地<sup>ち</sup>名<sup>な</sup>あり。古<sup>こ</sup>歌<sup>か</sup>も人<sup>ひと</sup>えて。この名<sup>な</sup>  
 たる舊<sup>ふる</sup>蹟<sup>せき</sup>あり。むりハ京<sup>きやう</sup>よ上<sup>かみ</sup>るもの鎌<sup>かま</sup>倉<sup>くら</sup>へ赴<sup>む</sup>くもの件<sup>けん</sup>の船<sup>ふね</sup>橋<sup>はし</sup>をさうしとぞ  
 當時<sup>たうじ</sup>の順<sup>じゆん</sup>路<sup>ろ</sup>あり。余<sup>よ</sup>いまだ親<sup>おや</sup>しくこの地<sup>ち</sup>を踏<sup>ふ</sup>みあがれば遠<sup>とほ</sup>近<sup>ちか</sup>方位<sup>ぶんぱい</sup>を詳<sup>あや</sup>せられ  
 ども途<sup>みち</sup>は新<sup>あたら</sup>古<sup>こ</sup>の差<sup>さ</sup>別<sup>べつ</sup>あり。又<sup>また</sup>その地<sup>ち</sup>名<sup>な</sup>存<sup>ぞん</sup>まはるその蹟<sup>せき</sup>むりは異<sup>い</sup>なり。あつたも  
 古<sup>こ</sup>蹟<sup>せき</sup>を辨<sup>わ</sup>ん。道路<sup>だうじ</sup>の順<sup>じゆん</sup>逆<sup>ぎやく</sup>を定<sup>さだ</sup>む。のハ彼<sup>かれ</sup>社<sup>しゃ</sup>は膠<sup>かう</sup>して琴<sup>こと</sup>を鼓<sup>こ</sup>むとひといま。

初輯第二十

綱<sup>あ</sup>總<sup>ら</sup>袴<sup>はかま</sup>の游<sup>あそ</sup>偵<sup>び</sup>  
 假<sup>かり</sup>裝<sup>ま</sup>束<sup>たづ</sup>の情<sup>あは</sup>郎<sup>らう</sup>





何などて遅延也。此朝夷は拘うして厄弱不具のれをどりぬ他友ハ  
 とあしなくまへに君が訪し来れば憑一氣なくあひあはれ説くやと  
 怨むれば時夏愧る面色老へる某と回答けく看病人ホをえんくもバ  
 室平ハそのらろをゆて奴婢ホを遠く退せ刀野野汚穢と誘ふやへ  
 居よりぬと招くまへに膝を進めて後方をえんて舌を細め某の夜さう  
 美邦を追蒐て遠く藩屏を起しうバこの天変を絶てあるべきの日暮して  
 帰宅あるればその見え遅きよあはれその故如此之箇様くと井平謀は違  
 始あり美邦逐電の為体勞して功なく神名川より久まらる終まをわらも  
 なく演説。某の夜井平が還らるる疑ひ起りて美邦が逐電をえんく  
 推察あるれども猝急なる目代は告て加勢をえん及バ屯一騎馳は  
 追蒐て勝澤のほうをえん井平を追蒐が天ハあど明む烏夜ある某馬を

乗とドて二人が捕らる。残念さよと介して今んごくとわらる室平  
 突て嘆息し追蒐て捕らる。和君が如く恙なくこれよまの幸は彼  
 朝夷が武藝勇力古今獨歩といふべき故渠天よりハ降らド。又地すして  
 浦ても山下園らど當所へ来るもの故又援んとて埋伏をえんわづれあはれど  
 人おて鬼神よりは不憚く四十餘人の雑兵へ彼奴をえん結果れらる  
 彼朝夷ハ領主の武威は憚る某は又をゆあてバやそれ師仕のゆゆゆて  
 足利殿へ吉見冠者罪なきよとゆかせ又時夏がト船は與り密書あり  
 わり汝り先非をえん。とが為は折く時夏が隱匿を顯せ然るハ其後  
 ころと来て汝が頭をえん。項骨よく見よといふや。耳は入るが  
 朽をくも氣絶すえん。そのものゆゆゆ宿所は扶入れ。頭髪はわの  
 わりとあつ。人よとせしてこれをえん。彼ト後と與られ。通和君が密書をえん。亦





金平師化



時  
床  
師  
縫  
子  
仕  
と

時

仆れ免る。と醫師許人を遣らば湯水と喝して城やふ勲をばこハ  
 いや中と驚き喜ぶ。宛宅の男女数を竭して取房を集めて異口同音に更  
 だる。いさく届く。鍼灸補写の致かたれ。枕方より後方より。食潜然と  
 泣く。時夏も鼻をうらめて。某年来目代ハ莫逆の友あり。その終焉を面談  
 せ。ハせめてのめり。各位愁傷をわん。所要わん。けり。心まか  
 せ。史と叮嚀。願。の。容書を袂に引。告別して宿所へ退。ぬ。て。由  
 室平師任。近曾。の。妻。身。ま。る。て。子。の。む。う。も。な。う。う。を。固。う。う。意。あ。ハ  
 ざる。もの。を。親。類。う。う。の。疎。を。遠。げ。双。婢。を。バ。只。苛。く。使。ひ。て。栄。利。を。旨。と  
 せ。の。め。り。の。夥。兵。さ。る。時。と。力。を。竭。せ。と。か。れ。バ。誰。う。時。夏。を。疑。ハ  
 べ。た。寔。に。重。く。撲。傷。あ。り。バ。や。と。墓。あ。く。な。り。な。る。と。ハ。さ。る。め。り。か。う。と。う。  
 却。説。刀。野。時。夏。ハ。巴。が。宿。所。は。還。り。つ。又。つ。く。と。あ。や。う。室。平。ハ。巴。が。資。よ。な。る

此ののどをい。渠尚これを疑へ。この故に絞殺して後やをく。さるめり。心よ  
 かる。五頭平。量。小。れ。う。う。興。て。彼。進。物。を。畧。らせ。ハ。諾。ひ。密。賤。の。柄  
 あり。且。この。餌。を。與。ひ。と。さ。り。な。し。の。嘆。ら。せ。や。ハ。當。國。を。こ。ち。去。ら。せ。  
 いと果敢なく。土民。ハ。生。拘。れ。る。癡。漢。か。も。バ。縦。救。ひ。ぬ。う。も。い。く。程。も。く  
 又。生。拘。ら。せ。て。呵。嘖。は。好。堪。ぞ。う。う。へ。さ。へ。首。伏。せ。る。と。も。わ。あ。ん。と。あ。ひ。よ  
 ち。色。バ。這。奴。を。威。して。四。境。に。守。兵。を。置。る。れ。バ。そ。が。あ。あ。ハ。脱。れ。ご。し。い。う。で  
 苦。肉。の。計。を。行。へ。と。欺。き。ま。り。め。く。憎。し。と。あ。み。美。邦。を。陥。る。回。わ。し。貝。許  
 牽。め。て。お。た。ハ。後。に。救。ん。ぬ。め。く。這。奴。を。賺。し。て。自。滅。を。と。く。せ。一。旦  
 與。せ。し。ご。う。を。世。中。の。人。も。あ。せ。し。と。と。云。云。計。を。し。る。師。任  
 既。に。死。し。も。バ。領。主。より。別。人。め。て。又。五。頭。平。を。鞠。問。せ。ん。ん。の。さ。び。よ  
 彼。癡。漢。が。箇。様。と。実。を。吐。は。れ。も。脱。ぎ。路。ハ。な。り。發。覺。さ。る。前。め。を。

ともかくもせむしと心むらゝあひ決めて密に准使つ小夜深く宿所を  
 たち師任が敷地あり獄舎のこへ潜ひある雨蕭と降をたてこの夜殊に  
 暗く多し案内知るとかまは築垣を乗踰り裡面のやを窺ふこの日  
 師任死にバ食忙然と呆れ果てその務を缺りの多うもさきバそのふ  
 管する獄卒さへ怠り人知らずも護りのあるをバ時夏竊は飲びく  
 獄舎の戸口を潜み早蟬と鳴られば裡面より五頭平誰と向  
 時夏凡を篠子を敲きさハ切りを時夏之和殿を救ひ出さんるよ  
 竊来つるをあらざるやといふは五頭平搔撈が戸口居り透り足て  
 馮心や刀野ぬれ髪結れるその日より心まあのとせられても淑妃所なるよ  
 あざざれいひみくとあひつる前諾を違ひてそやも竊来ゆふと今さう感  
 謝は堪ざるものとていつやて脱出んと篠子もさけ密詰り時夏夢てされが

とも救ひ出ハ難くもあは後と今些時早くを振くを脱去るも夜を  
 かく遠く走てふうくの蹤を埋めハ粹完とハいづくも餓てハ特難美  
 かん且兵糧を肝要ある空しく時を移さんる腹を造りて出さ真実  
 ともく懐き焼餅をさう出ハ篠子の間より入して遞与せ五頭平は  
 おも飲ひ送るうな和君が懇切なる賞翫せざるべき時をうてハ百味の  
 珍膳を延る仙丹之瘦る肚は実を入りてまるまんと件の餅を引  
 ちぎる喋りて音しく息をも吻で食ひ竭して胃を拊今ハや縛足ぬ  
 願くハ一碗の湯を飲むと戯る舌もゆるむ五頭平は苦と叫び  
 さるは倒れんとて膝組締ある切や彼餅は充まハ忍び五頭平  
 後大苦痛り毒菜をあはさるやといハ時夏冷笑ハ通五頭平明察  
 なるこれ美邦小をさう遊つ師任ハ疑は計りさハみか瀬詰ふ趣舎

ころきわかれが汝が口より機密を洩され吾儕は崇あらん。後先見らばして  
 やす。安らばよと目代師任を竊に絞殺し。かくて汝を毒殺せれば機密を  
 ありし。竟に脱しぬ命をと諦てそ中死後肉極に苦痛をまむの事  
 不便のゆゑと誇貌を悦示され五頭平ハ驚死怒りて藩子ヲ携り起る  
 多ハ轉輾び悶々しむ必死の呼吸をのれ時夏冥土の伴侶啖著り此の志  
 復さざるを敦圍声も漸々細る。菴の鳥猛きあろも弱りて檻に驚き  
 如く膝折伏て息絶す。時夏外向よかほ立在て窺ふ。既而て氣息が  
 荒ふと笑て足がふ。舊本より退きつ又堀を踰色を潜つて竊に  
 宿所より入り。かくてその次の日は室平が親族夥兵ホ領主の館へ入り。つ  
 師任が病死及五頭平が頓死の事を訴へ。兼忠は眉を顰め逆徒美邦ホ  
 逐電してのち。往方をあぐる。師任ハ深瘡に没し。又五頭平ハ禁獄の疲勞ホ

落命せしといハ穿鑿の度を失ふ似う。され刀野時夏を彼顛末を  
 つらめ嚮はつとあれ。太郎を召て向べ。師任が徒ハ且退出よとされ  
 々。さる程刀野太郎時夏ハ俄頃ハ領主を招れて。晴や小衣裳を整へ  
 ともや苦文所よ本より。兼忠對面して五頭平を生拘る。そののち。美  
 美邦逐電の聲。此曲は問々。毎ハ時夏憶る氣色なく。言を巧み  
 流り飾り。井平美秀廣光ホも皆修羅五郎經任ハ一味同意の事。以達  
 美邦を追とめん。勝澤の松原ゆく。苦戦せし夜の形勢。又五頭平を  
 生拘る。その日。此の為体。おれををけあり。負ハ辨伎利口。任し。彼を  
 賤して我を褒め。國の為よ力を竭。亡父の汚名を雪んとて死を。辞  
 彼徒を搦捕人とせし。如く言委をかく。答々。美兼愚將よ。あれども  
 刀野ハ親く言見ハ疎る。具員とハ。その言ハ理ある。ごとく。せられ。説

迷きれく感嘆し親は遙立おさる通愛の死仕伎を此度相殿が誠忠ハ  
 謙倉殿頼へ上達せん今すく所の如くわは彼美邦が徒は是返送の餘類之  
 渠が支堂をほあへ。あつひくは穿鑿していしく忠勤を励まへ。あつひく  
 本領安堵のり遠くは制度あり元年来扶持せしれさへは面をむか  
 この耐之努よくせよと褒賞し之時夏を退せこの日謙倉の營中へ騎馬の  
 使者をまわせし件之粹の趣をもちもかく注進を第三日の曉に因幡介  
 廣元の奉翰に執持時政の下行書を相添て美邦美秀未を追捕のり。  
 骨相書をめく速に國へ徇ありしひべ。又時夏が忠勤の為休む神妙ハ  
 恩召猶孔明を遂させく勸賞の沙汰ありと美兼又下知せし時夏  
 ことを傳へてやくを笑てをぬる。案下某生再説井平ハ美邦の蹤を  
 慕ひて加賀の小松を心あていそぐとまれと途遙る客宿をうさひくつ。

日し方歴てやう多し佐味内が宿所を訪ふいぬる年あり押營頼親  
 志く仕まつて在謙倉とをせえそのあつひく家ありぬ誰向とも美邦の  
 安危を其処よりありあへき。あつひくはさうだのめをいつふるせんを此  
 ところりして街衢は美邦美秀へはさうて骨相書と掛られ穿鑿  
 嚴重ありしを驚たおれ其処を立退た他一郷は立よればあつひく又  
 己が骨相書ありかむ彼人ハそを囚徒とありあつひく。又山林の身を懸て  
 緯静るをもちあつひく秋愁は蹤を慕ひ徒は徘徊せば。これ亦細裏の魚と  
 なりん。駿河前司廣綱朝臣ハ年来退隠一かへも謙倉殿よりあつひく  
 あつひく一族の上船之彼刀祢をへ身と高か寛屈の縲縛を脱れぬせん  
 六ひひひひくは菅蒲の尼公の愛顧を蒙り廣綱朝臣は見えし恩贖  
 さへあつひく。再会の契あり明地は危窮を告て憑き身らも知と



尋思一つ姿を変せどよく尚消残る北國の雪を踏山路を辿り辛く  
 して越路を過りて信濃上毛國ありて超々すれど露宿る野中の  
 月を夜と一瞻仰をよやく風を梳りて八世のまゝのし水鏡に影さへも曇り  
 さぬぐみ旅の悲しみのあらは草や木やの心あはれなく虎の尾を致す恐懼  
 患難比るはおろくべし去らばあれども恙なく夏の四月十日ありて武蔵國  
 大田の莊ある藍玉院に來著を比立尼寮に赴けり竊に巴の尼を向て  
 云云とひひ入ると察すも認るものありて遽に迎へてよくをまゝあぬ  
 巴の尼は三月の盡し豫ての志願なればとて院主は別を告ぎり又國を  
 廻んとて何処となく出ておぬ彼尼今ハ何と云ふも院主はよく身が  
 りをさしめんと想像すまで俟てひくごをばせりとくあること草鞋脱して  
 客房に誘引ついと叮嚀は管待り尼公はかくと告あらせ且く疲勞を

休りとおて美れとを命らる井平八巴の尼はあはれなきがわおれども歎待り  
 弥まていと憑りたは心あはれぬて敢亦疲勞を厭はざり裳に華一件の比立尼  
 後より跟く菅蒲の尼公は見系を當下尼公は井平が前格を違へど  
 多しを衰させと恙かやと問ゆバ井平は恭しく寒暖を述無異を祝し  
 こそ美邦の往方あるに追捕せしむ嚴重を骨相書をめて索らる  
 こそう人又人の入客宿の患難日夜の恐怖彼となく酒やう言はじ  
 犯せる罪はあはれども有懲は命ハ惜れものにて慚を忍び姿を變り人來は  
 入りの喪家の狗は人な媚び窮鳥懐に入るは似てん救命運音は聞かざり  
 擗捕せしものあり亦是尼公の慈善はよろかん末期の十念美をうて來  
 世を安くせんぬる再び多くといひ沈て演りるバ尼公は笑て嘆息し  
 らせがたみしう。去るあをこそも當院よりび足をへるものハ罪の重なるを





みちの  
あまの  
乃花  
か  
平恋也  
る

月夜



お

かつら姫



并平

お

朝

かし彼弓箭を貸みたる某弓術未熟といふとも名たる武器の威徳よあて  
 物の怪退散せり又欽慮外の所望よ身を顧むいと憚あるとかれもまた  
 まてゆくいとあつてこゝろに公のまてち点頭件の弓箭廣細が殊に秘苑の  
 物かれも何れも姫が為とて金させて竊み貸へ夜をな深つとくくと頻よ  
 いとど立ぬ且見姫の方なるやも豫くありをぬうえ校枝といふ女房よ若黨  
 奴隸を相副て井平よ案内せよと迎ぐる子遣しとて凡公校枝を召近づけて  
 かほ又聲のありをぬえをあつても専女を副て廣細の宿所を遣しあふ  
 藍玉院とてその間いと近けれが程もなく衡門を進み入るふ有撃國司の  
 餘波とて茅葺かれの家造り田舎なるよ都備より井平ハ誘引せり  
 左邊の築垣を遠り入るよの処庭門あり裡面ハ名樹夥あべし。夜目  
 かれは定ちなれば校枝いづより先よ走て措打戸をほとくと敲く程女の童小

紙燭秉りたる老女出て井平ホを迎へ廊より母屋のぼしてこれ彼よ挨拶を  
 その管待よりづ密やくあて男子たるものをとせ且くして件の老女ハは耦よ  
 弓箭をとり来て素衣を解た胡録をかり立て井平はさうはさしよせとあん  
 雷上動の弓共羽透羽の箭前よ侍り物の怪ハ丑と寅の時の間小かんと徒然とせ  
 られ所用あつた女の童を呼せぬと慰めて食奥まゝる所よ入るぬ井平彼  
 弓箭をとりあげてお戴たつとくるよ尋常のめはあつたれりしるる  
 瀬よ立むこの弓この箭を取らうあんや一期の面目この人かんと心よ  
 勇ありする悪灵妖怪ありとも漏れぬめと弓杖衝を且見姫の遺所と  
 おぼしき一室のこゝろに掛ら翠簾をさし入るをまよゆして通宵をう護りしる  
 この設持の長女なれば編を扇巻を更て第三編の初は解免出像めは鏡具を色う

編述

曲亭馬琴稿本



浄書

荏土

千形仲道  
棚加正藏

出像

一柳齋豊廣畫



棗人

京攝 六割 刷合刊

春王正月  
文化四年丑歲

吉日發兌

江戸馬喰町三町目 若林清兵衛  
筋違御門外平永町 山崎平八  
大坂心齋橋唐物町 河内屋太助

○江戸著作堂主人隨筆並國字小説畧目 浪華書肆文金堂藏版

あが佛の記

隨筆大本  
六冊近刻

この書よ名つらうり紫女の筆をとりしあが佛の記といふは  
いふに仏のあがれどもも持仏の御よまろくおほゆるハ  
人欲の私ぞあま人の徳も又あなうとみく減ゆるの記

里見八犬傳第二輯

柳川重信画 全五冊 去九月  
矢吉のうら犬塚あつた川莊助の傳りむこの編あり

朝夷巡鳴記第三編

歌川豊廣画 全五冊 来寅正月  
奥州厨川の無様退治よ起りて美秀謙倉よかよよ終る

燕石雜志

隨筆佳説奇談多し 全六冊

俳諧歳時記

四季の詞細注便宜の一書 全二冊

月水奇縁

以下各入よと本 全五冊

新累解脱物語

北齋画 全五冊

昔語質屋庫

春亭画 全五冊

松深情史秋七草

豊廣画 全五冊

曲亭家傳神女湯同精製奇應丸同婦人つき虫妙樂并曲亭画賛角取次仕

